

きのこの標本・学名よもやま話

おりはらたかみち  
折原貴道 (学芸員)

当博物館では、常設展示されている菌類の標本・模型こそ少ないものの、収蔵庫内には標本番号が付けられているものだけでも約3万点の菌類標本(変形菌を含む)が現在収蔵されています。中には、タイプ標本とよばれる、生物の学名の基準となる学術的にも重要な標本も含まれています。タイプ標本の扱いを含む、生物の学名に関するルールは、3種類の国際命名規約により定められており、各生物により適用される命名規約が異なります。菌類の場合、『国際藻類・菌類・植物命名規約』が適用され、この規約の下でタイプ標本はさらにいくつかの区分に分類されています(以下、本命名規約を基に話を進めます)。

タイプ標本のもっとも基本的かつ重要な区分として「ホロタイプ(正基準標本)」があります。学名を論文などで公表する際に、一つの種または種内分類群(亜種など)の学名に対し唯一つの標本または図解をホロタイプに指定します。すなわち、一つの学名に二つ以上のホロタイプが存在することは決してありません。

しかし、命名規約による学名のルール整備が不完全であった古い時代に発表された学名の中には、もともとホロタイプが明示されていなかったり、紛失してしまっていたりする場合があります。このような場合、その学名が発表された資料(論文など)に示された標本や図解から、ホロタイプの代替物を指定することになります。このような標本(または図解)を「レクタイプ」といいます。ここでは、菌類(きのこ)のレクタイプの例をご紹介します。

筆者の専門はきのこ類の系統分類ですが、特に地下生菌とよばれる、地上に



図1 ジャガイモタケ。下は断面。

あまり顔を出さない、柄や傘が退化したきのこ類に興味を持って研究しています。ジャガイモタケ *Heliogaster columellifer* (Kobayasi) Orihara & Iwase はそのような菌の一例で、その名の通りジャガイモのような色と形をしています(図1)。このきのこは1936年に高名な菌類学者、小林<sup>こばやし</sup>義雄<sup>よしお</sup>博士(1907~1993)により新種として発表されましたが、その際、ホロタイプに相当する標本は指定されませんでした。筆者が以前、本種の研究を手がけた際、新種発表の際に示された4つの標本のうち、1930年に東京大学の小石川植物園で小林博士が採集された標本を再発見し、論文中でこの標本をレクタイプとして指定しました。ちょうど今年の10月に、小石川植物園で菌類を採集する機会に恵まれましたが、残念ながら85年ぶりの同地での本種の再発見とはなりませんでした。

図2は1929年に、ナメコが新種として論文で発表された際に用いられた原図です。ナメコを新種記載したのは、日本初の理学博士として著名な伊藤<sup>いとうけいすけ</sup>圭介<sup>けいすけ</sup>の孫である植物学者、伊藤<sup>いとうたろう</sup>篤太郎<sup>たろう</sup>(1865~1941)で、彼は本種に *Collybia nameko* という学名を与えました。2008年、森林総合研究所の根田<sup>ねだ</sup>仁<sup>ひとし</sup>博士は *C. nameko* の新種発表論文で示された標本が散逸していることを指摘し、命名規約にしたがい、論文中に用いられた本図そのものを *C. nameko* のレクタイプに指定したのです。これは図解がレクタイプとして指定された珍しい例です。本図は今関六也氏の菌類画コレクションのうちの一つで、当博物館に所蔵されています。今年、当博物館にて開催された特別展『生き物を描く〜サイエンスのための細密描画〜』で一般公開もされました。

科学の世界で、1種の生物に用いられる学名は一つです。しかし、様々な経緯で、1種の生物に複数の異なる学名が付けられてしまうことがあります。これらは「シノニム(異名)」とよばれ、原則として先に発表された学名が優先的に採用されます。一方、シノニムとは逆に、一つの学

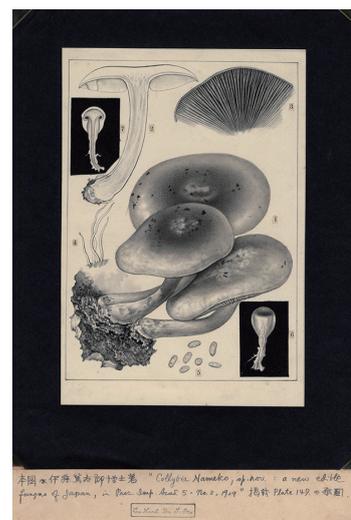


図2 *Collybia nameko* T. Ito (ナメコ)の新種記載に用いられた図の原図。

名が、異なる種に付けられてしまうこともあります。このような学名を「ホモニム(同名)」と呼びます。ホモニムはシノニムと比べるとずっと数が少なく、問題となるケースはそれほど多くありません。幸か不幸か、筆者はホモニムの問題を手がけたことがあるので、最後にその例をご紹介します。

地下生菌の属である *Octaviania* (ホシミノタマタケ属)の分類を進めていた時、過去の文献中で *Octaviania nigrescens* という学名が、それぞれオーストラリアと北米から記載された異なる種に当てられていることが分かりました。調べてみると、北米の方の種は初め別の属に含まれる菌として記載され、その後の研究で所属する属が変わった結果、同じ学名の種が存在することになってしまったことが分かりました。そこで、筆者はアメリカの研究者と共同で、その北米産の種に対し、換わりの学名(置換名) *Octaviania zelleri* Orihara & M.E. Smith を論文中で提案しました。このような仕事は大変地味で、専門家からも顧みられることは少ないですが、将来の科学の発展へのささやかな貢献として、小さな石を積み上げていくことを今後も続けてゆきたいと考えています。

参考文献

Neda, H., 2008. Mycoscience 49: 88-91.  
Orihara T., Sawada F., Ikeda S. et al. (8 authors), 2010. Mycologia 102: 108-121.  
Orihara T., Smith M.E., Shimomura N., Iwase K., Maekawa N., 2012. Persoonia 28: 85-112.